

# 第6章

## 子どもに対する進学期待、 身につけさせたい力、社会意識

### 第1節 ＊ 幼児期の子どもに対する進学期待

都村 聞人

幼児期の子どもをもつ母親は、約9割が子どもに高等教育への進学を期待している。しかし、進学期待には子どもの性別、きょうだい数、出生順位による差がみられる。その背景には、授業料などの教育費負担が大きいことが考えられる。

文部科学省「学校基本調査」によれば、高等教育機関進学率（大学、短期大学、高等専門学校、専門学校）は、平成23年度に79.5%に達している（過年度卒業者を含む値）。高等教育への進学が一般化するなかで、幼児期の子どもをもつ母親は、子どもにどの段階までの進学を希望しているのだろうか。

#### 1. 高等教育への進学を期待する母親が約9割

表6-1-1は、母親が子どもに希望する進学段階をみたものである。四年制大学、大学院、短大、高等専門学校、専門学校という広義の高等教育機関への進学を期待する母親が約9割に達している。期待する割合がもっとも高いのは、「四年制大学卒業まで」であり、61.1%となっている。他方で、「高校卒業まで」を希望する母親は10.6%にすぎない。子どもに高いレベルの教育を受けさせたいという期待が幼児期から大きいことがわかる。

#### 2. 子どもの性別により進学期待に差

図6-1-1は、子どもの性別による進学に対する期待をみたものである。どの高等教育機関への進学を期待するかに関しては、子どもの性別により違いがみられる。「四年制大学卒業まで」を希望する割合は、子どもが男子の場合71.6%、女子の場合50.8%と男女差が大きくなっている。また、子どもが女子の場合は、「短大・高等専門学校卒業まで」を希望する割合が25.7%となっており、男子に比べて高い。

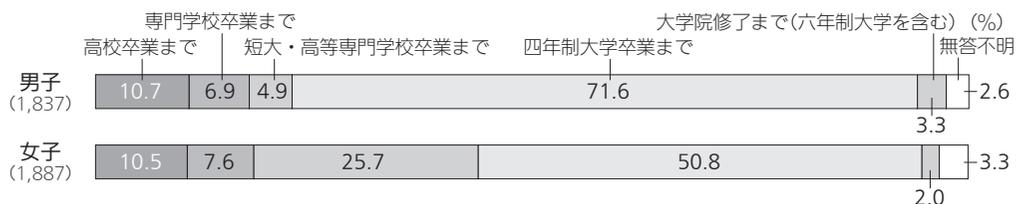
短期大学への進学率は、10年ほど前から低下しはじめ、平成23年の女子の短大進学率は10.4%となっている。短大進学率が低下するなかで、女子に対する進学期待として、短大が依然として有力な選択肢となっている点が興味深い。ただ、本調査は幼児期の子どもをもつ母親を対象としており、子どもの年齢が高くなるにしたがって、進学期待も変化するものと考えられる。

表6-1-1 母親が子どもに希望する進学段階（年少児～年長児）

	(%)
中学校卒業まで	0.0
高校卒業まで	10.6
専門学校卒業まで	7.2
短大・高等専門学校卒業まで	15.5
四年制大学卒業まで	61.1
大学院修了まで（六年制大学を含む）	2.7
無答不明	3.0

注) サンプル数は3,731人。年少児、年中児、年長児の合計。学年の無答不明も含む。

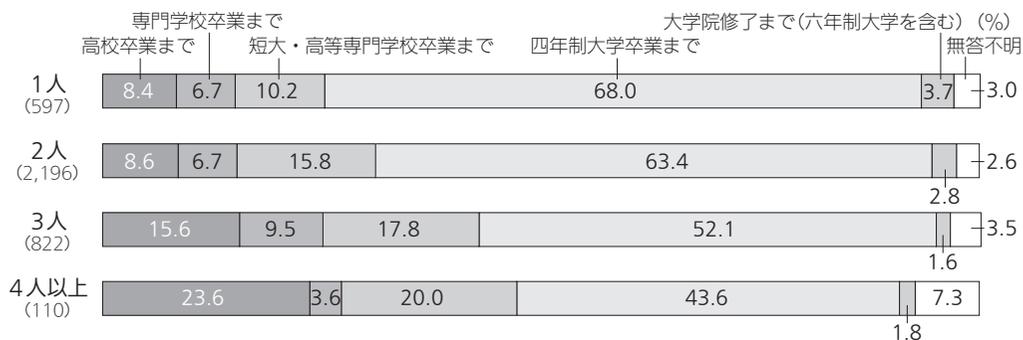
図6-1-1 母親が子どもに希望する進学段階（年少児～年長児・子どもの性別）



注1) 「高校卒業まで」は「中学校卒業まで」を含む。

注2) ( )内はサンプル数。

図6-1-2 母親が子どもに希望する進学段階（年少児～年長児・きょうだい数別）



注1) 「高校卒業まで」は「中学校卒業まで」を含む。

注2) ( )内はサンプル数。

### 3. きょうだい数が多いほど、高等教育への進学期待は低下

次に、きょうだい数別に進学に対する期待をみてみよう（図6-1-2）。「四年制大学卒業まで」を希望する割合は、きょうだい数「1人」（つまり、ひとりっ子）の場合68.0%、「2人」きょうだいの場合63.4%、「3人」きょうだいの場合52.1%、「4人」きょうだいの場合43.6%となっており、きょうだい数が増加するにしたがって割合が低下している。他方で、「高校卒業まで」「短大・高等専門学校卒業まで」を希望する割合は、きょうだい数が増えるのにもとない上昇している。きょうだい数が多いほど、子どもに希望する教育レベルを引き下げている傾向がよみとれる。

こうした背景には、授業料などの教育費負担が大きいことがあげられる。きょうだい数が多い場合には、高等教育機関への進学を断念する、あるいは短大などに進学させ在学期間を短くすることにより、教育費負担を軽減せざるを得ない状況があるといえよう。とりわけ高等教育機関へ進学せずに就職した場合には、授業料などを支払わないだけでなく、生活コストも子ども自身がまかなう可能性が高いため、経済的な違いは大きい。

また、本調査は幼児期の子どもをもつ母親を対象としているため、今後さらにきょうだい数が増える可能性があるが、四年制大学等への進学を重要と考える世帯ほど子ども数を抑制することも考えられる。

### 4. 出生順位が低い場合、進学期待も抑制されている

子どもの出生順位と進学期待の関係をみてみよう（図6-1-3）。男子の場合、出生順位が「2番目」までのとき、「四年制大学卒業まで」を望む割合が73%程度であり、

順位による差は小さい。出生順位が「3番目」となると「四年制大学卒業まで」を望む割合が62.4%に低下し、「高校卒業まで」を希望する割合が21.4%に増加する。

女子の場合、出生順位が進学期待におよぼす影響が男子より明確である。「四年制大学卒業まで」を希望する割合は、出生順位が「1番目」のとき56.9%、「2番目」のとき48.2%、「3番目」のとき37.1%と低下している。他方で、出生順位が「2番目」のときは「短大・高等専門学校卒業まで」を希望する割合が28.6%と高くなり、「3番目」のときは「高校卒業まで」を希望する割合が15.2%まで増加している。

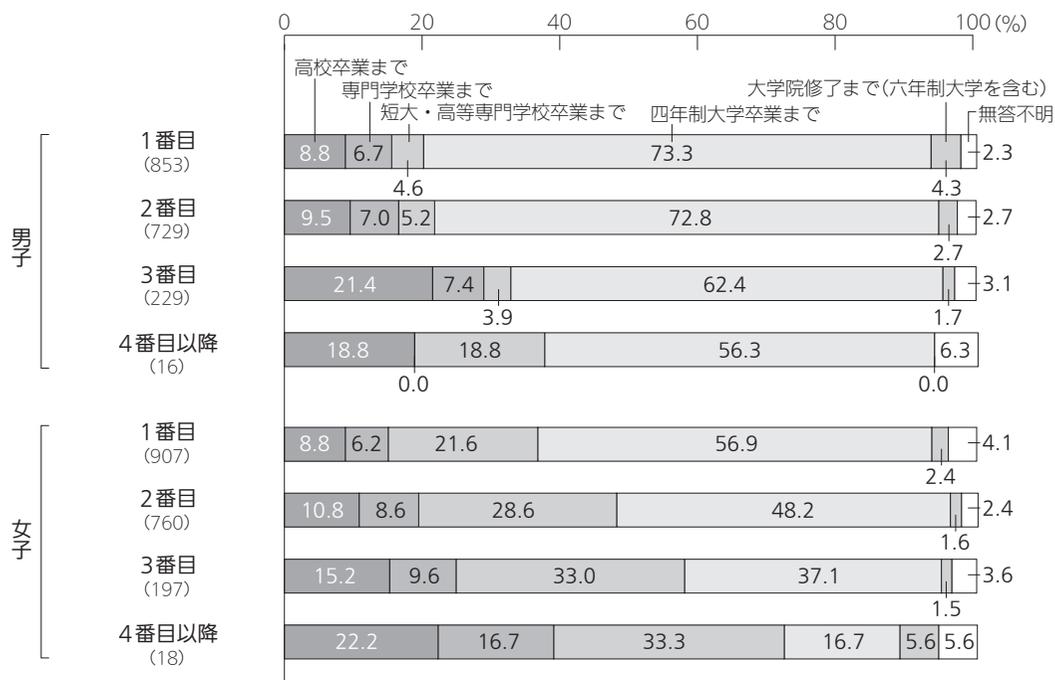
本調査は幼児期の子どもをもつ母親を対象としているため、出生順位にしたがって進学期待が変化することは、母親による教育費負担の調整意識の反映と考えることができる。子どもの能力や適性がある程度明確になる高校生などの段階ではなく、幼児期の子どもの進学期待にきょうだい数や出生順位による差がみられるのは、家計への影響を考慮していると考えられるからである。

母親が世帯の子ども全体の教育を考える際に、女子よりも男子を優先し、女子には短大進学などを期待するというやり繰りを検討せざるを得ないのかもしれない。

### 5. 母親は自らの教育経験をもとに子どもへの進学期待を考えている

図6-1-4は、母親の学歴別に子どもに対する進学期待をみたものである。まず男子についてみると、母親が高等学校卒の場合、26.7%が子どもにも「高校卒業まで」を期待し、55.2%が「四年制大学卒業まで」を期待している。母親が四年制大学卒・大学院修了の場合、「四年制大学卒業まで」を期待する割合が86.5%に達する。

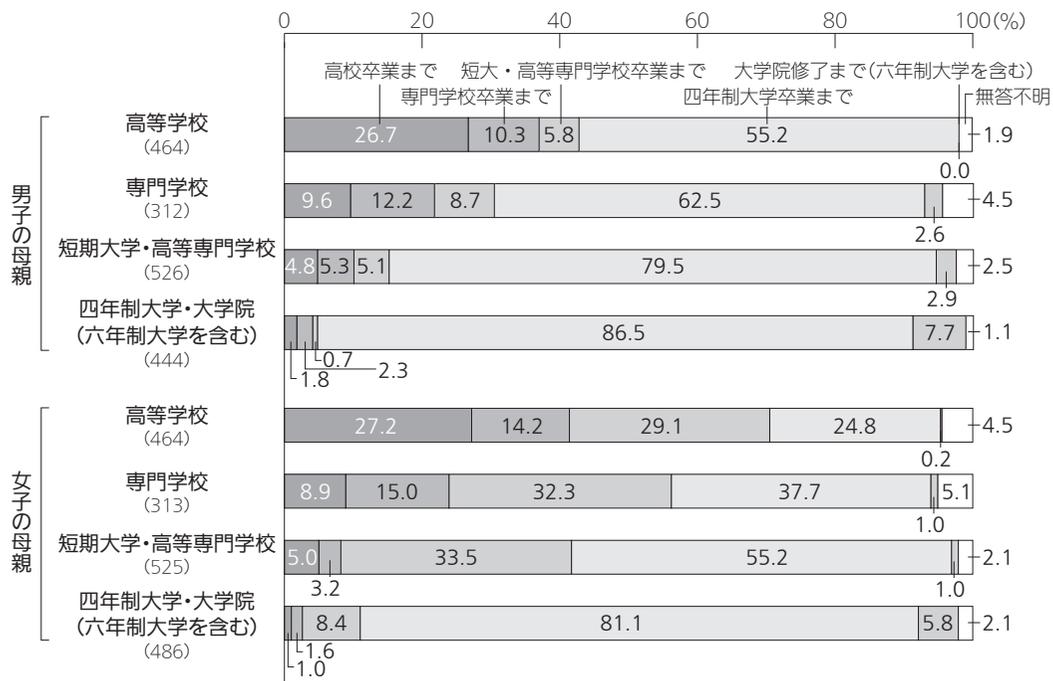
図6-1-3 母親が子どもに希望する進学段階  
(年少児～年長児・子どもの性別・出生順位別)



注1) 「高校卒業まで」に「中学校卒業まで」を含む。

注2) ( )内はサンプル数。

図6-1-4 母親が子どもに希望する進学段階 (年少児～年長児・子どもの性別・母親の学歴別)



注1) 母親の学歴において、「高等学校」に「中学校」卒業を含む。

注2) 子どもに希望する進学段階において、「高校卒業まで」に「中学校卒業まで」を含む。

注3) ( )内はサンプル数。

次に女子に関してみると、母親が高等学校卒の場合、進学期待は多様であり、もっとも希望が多いのは「短大・高等専門学校卒業まで」(29.1%)であり、以下「高校卒業まで」(27.2%)、「四年制大学卒業まで」(24.8%)、「専門学校卒業まで」(14.2%)の順となっている。母親が何らかの高等教育機関に進学した経験がある場合、子どもにも高等教育機関の卒業を期待する割合が高まり、「高校卒業まで」という希望は低下する。母親が四年制大学卒・大学院修了の場合、「四年制大学卒業まで」を期待する割合は8割以上となり、男子とほぼ同水準になっている。

以上の結果から、本調査における子どもに対する進学期待は、母親の教育経験を反映していることがわかる。母親は子どもに、自らと同じ程度かそれよりも長期間の高等教育を享受することを期待しているといえるであろう。

また、前述したように、本調査における母親の進学期待においては、現在の短大進学率に比して、短大卒業を希望する割合が高い。図6-1-4によれば、女子に「短大・高等専門学校卒業まで」を期待するケースは、高等学校卒、専門学校卒、短期大学・高等専門学校卒の母親に多く(それぞれ29.1%、32.3%、33.5%)、母親が四年制大学卒・大学院修了の場合は非常に少ない(8.4%)。母親が四年制大学を卒業していない場合に、子どもに短大卒業を希望する割合が高くなっている。

## 6. 世帯年収が多いほど子どもに長期間の教育を期待している

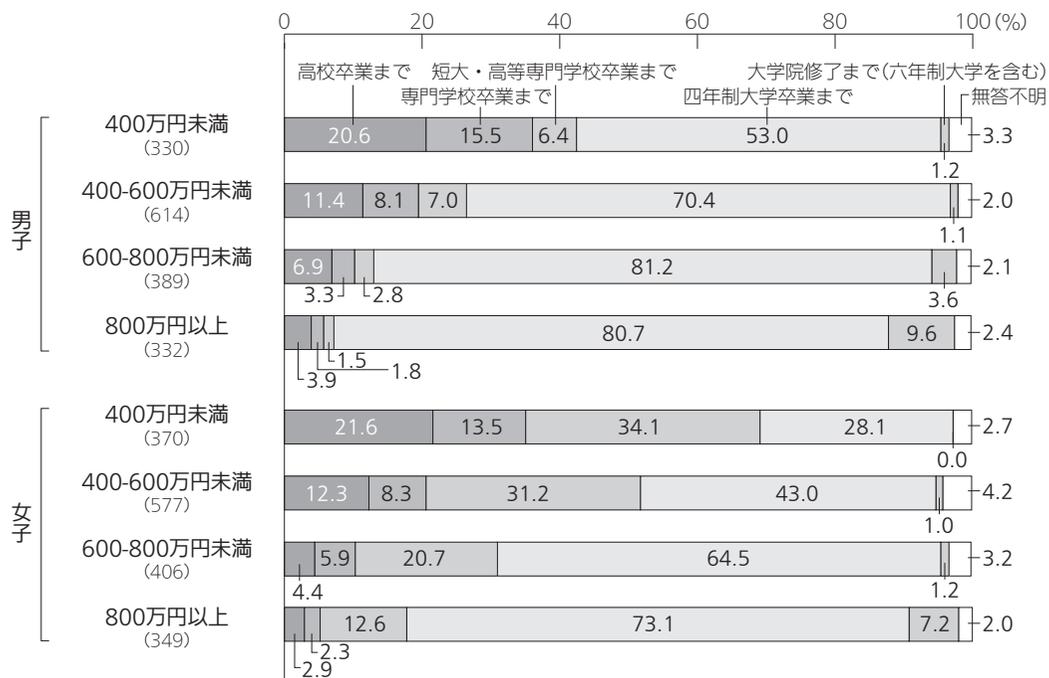
将来の進学期待とはいえ、現在の世帯の収入の水準を考慮に入れて、子どもの教育について考える可能性は高い。図6-1-5は、世帯年収別に進学期待をみたものである。

子どもの性別を問わず、世帯年収が多くなるほど、子どもに「四年制大学卒業まで」を期待する割合が高くなっている。他方で、世帯年収が多くなるほど、「高校卒業まで」、「専門学校卒業まで」、「短大・高等専門学校卒業まで」を期待する割合は、低下している。

また、世帯年収800万円以上の世帯において、子どもに「大学院修了まで(六年制大学を含む)」を期待する割合が高いことが顕著である(男子は9.6%、女子は7.2%)。小学校入学前の子どもに大学院進学を希望するということは、当該の子どもに手厚い教育を行いたいという母親の強い意志のあらわれととらえることができよう。

以上のように、世帯年収の水準と子どもへの進学期待は関連を有していることがわかる。本調査は幼児期の子どもをもつ母親を対象としており、子育てに専念するため一時的に就労をとりやめている、あるいはパート労働にきりかえている母親も多いと考えられる。今後、子どもが成長するのにもなって母親が就労を再開、あるいはフルタイム労働に移行し、子どもの教育費を捻出することも予想される。その意味では、子どもに対する進学期待にもとづいて、今後の世帯年収が変動するともいえる。

図6-1-5 母親が子どもに希望する進学段階（年少児～年長児・子どもの性別・世帯年収別）



注1) 「高校卒業まで」に「中学校卒業まで」を含む。

注2) ( )内はサンプル数。

## 第2節 ＊ 子どもに社会に出るまでに身につけさせたいと考えること

都村 聞人

子どもに社会に出るまでに身につけさせたいと考えることは、母親の学歴によって違いがみられる。母親が四年制大学卒業の場合には、生涯の基盤となる力を養成してほしいという期待が強く、母親が高校・専門学校・短期大学卒業の場合には、将来の職業的自立に向けた現実的な期待を抱いている。

本調査は、「将来、社会に出るまでに、お子さまにどんなことを身につけさせたいと考えていますか」という質問を行っている。「小学校に入学するまでに身につけておいてほしいこと」が短期的な期待とすれば、「社会に出るまでに身につけさせたいこと」は長期的な期待と考えることができる。母親はどのようなことを身につけさせたいと考えているのであろうか。

### 1. コミュニケーション能力に対する期待が高い

本調査においては、「将来、社会に出るまでに、お子さまにどんなことを身につけさせたいと考えていますか」という質問のなかで、8つの項目に関し、「とてもそう思う」「まあそう思う」「あまりそう思わない」「ぜんぜんそう思わない」の4段階でたずねている。

「高い語学力」と「海外での生活経験（留学を含む）」を除いた6項目においては、「とてもそう思う」と「まあそう思う」の回答の合計が8割をこえ、母親が子どもにおおむね身につけさせたいと考えていることがわかってい

図6-2-1は、8つの項目に関して、「とてもそう思う」という回答の割合を示したものであり、母親がとくに身につけさせたいと考えている項目がわかる。

図6-2-1によれば、「人との関係づくり」に関しては、78.1%の母親が「とてもそう思う」と回答しており、社会に出るまでにコミュニケーション能力を磨いてほしいという母親の期待がよみとれる。また、「タフな精神力」(60.0%)「将来進みたい領域に必要な知識」(54.1%)に対する期待も高い。他方で、「高い語学力」「海外での生活経験（留学を含む）」に関しては、それほど必要性を感じているわけではない。

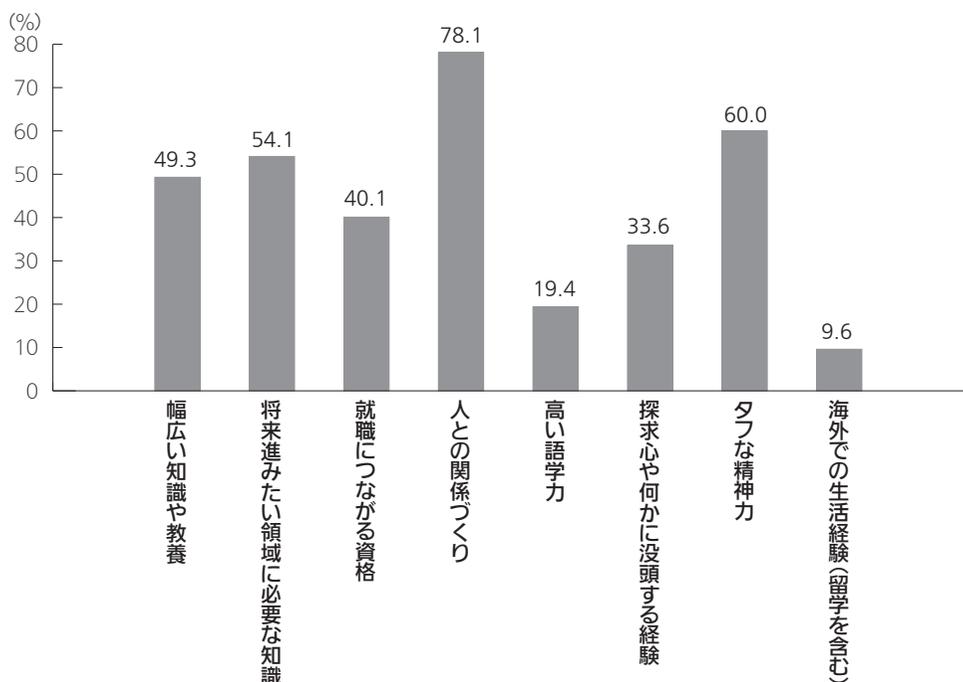
### 2. 母親の学歴によって異なる期待

図6-2-2は、母親の学歴別に社会に出るまでに身につけさせたいことをみたものである（8項目から5項目を抜粋）。母親の学歴に関しては、「高校・専門学校・短期大学卒業」と「四年制大学卒業」に分類している。

「幅広い知識や教養」に関しては、母親の学歴を問わず、「とてもそう思う」「まあそう思う」の合計が95%をこえており、期待が大きい。母親の学歴別にみると、母親が「四年制大学卒業」の場合に、「とてもそう思う」の割合が高い（57.5%）。

「就職につながる資格」に関しては、母親が「高校・専門学校・短期大学卒業」の場合に、「とてもそう思う」の割合が42.8%であり、母親が「四年制大学卒業」（32.4%）よりも、強く必要性を感じている。母親が「四年制大

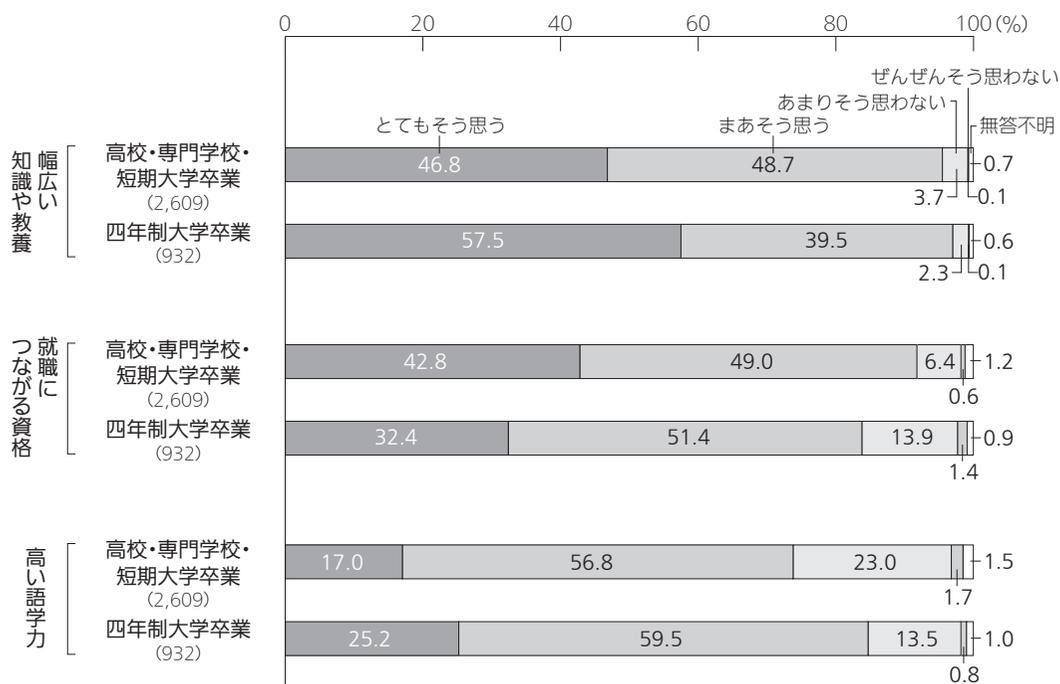
図6-2-1 社会に出るまでに身につけさせたいこと（年少児～年長児）



注1) 「とてもそう思う」の%。

注2) サンプル数は3,731人。年少児、年中児、年長児の合計。学年の無答不明も含む。

図6-2-2 社会に出るまでに身につけさせたいこと（年少児～年長児・母親の学歴別）



注1) 母親の学歴において、「高校・専門学校・短期大学卒業」には「中学校」「高等専門学校」卒業を含む。また「四年制大学卒業」には「大学院（六年制大学を含む）」を含む。

注2) ( )内はサンプル数。

学卒業」の場合には幅広い知識や教養を重視し、母親が「高校・専門学校・短期大学卒業」の場合には資格などの実践的な力を重視する傾向がよみとれる。

「高い語学力」に関しては、母親が「四年制大学卒業」の場合に期待が大きく、「とてもそう思う」25.2%と「まあそう思う」59.5%を合計すると、80%以上が身につけさせたいと考えている。

「探求心や何かに没頭する経験」については、母親が「四年制大学卒業」の場合に、「とてもそう思う」の割合が高く約半数となっている。他方で、母親が「高校・専門学校・短期大学卒業」の場合には、「あまりそう思わない」が16.0%となっており、必要性をあまり感じていない層も存在することがわかる。

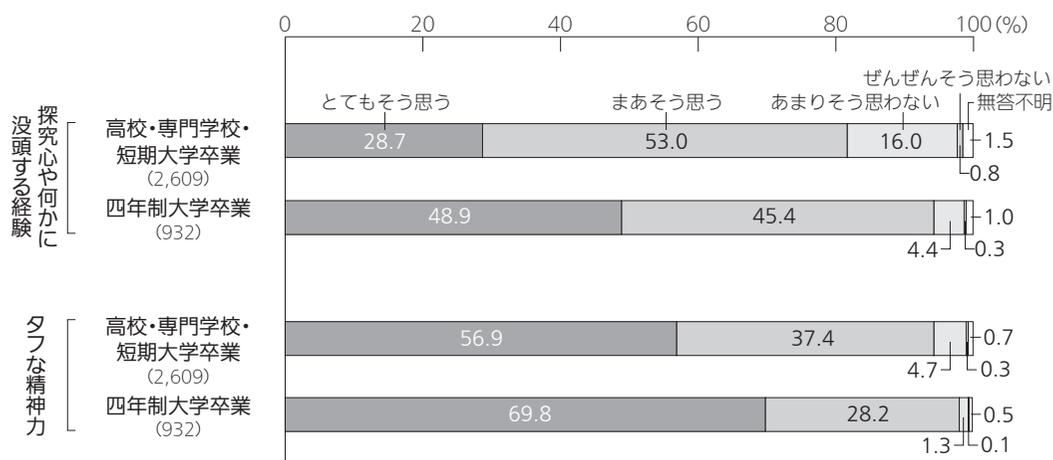
「タフな精神力」については、母親が「四年制大学卒業」の場合に、「とてもそう思う」の割合が69.8%と高くなっている。他方で、母親が「高校・専門学校・短期大学卒業」の

場合には、「とてもそう思う」の割合は56.9%となっている。

以上の調査結果から、母親の学歴により、社会に出るまでに身につけさせたいことに関してやや違いがあることがわかる。母親が「四年制大学卒業」の場合には、「幅広い知識や教養」「高い語学力」「探求心や何かに没頭する経験」「タフな精神力」を身につけてほしいという割合が「高校・専門学校・短期大学卒業」の母親よりもやや高く、子どもの生涯の基盤となる力を養成してほしいという希望が見出せる。他方で、母親が「高校・専門学校・短期大学卒業」の場合には、「就職につながる資格」を身につけてほしいという割合が「四年制大学卒業」の母親よりもやや高く、将来の職業的自立に向けた現実的な期待を抱いていることがわかる。

このような身につけさせたい能力に関する期待の差異は、母親の潜在的な意識の表れと考えられ、幼児期以降の子どもの教育に影響を与える可能性がある。

図6-2-2 (続き) 社会に出るまでに身につけさせたいこと  
(年少児～年長児・母親の学歴別)



注1) 母親の学歴において、「高校・専門学校・短期大学卒業」には「中学校」「高等専門学校」卒業を含む。また「四年制大学卒業」には「大学院（六年制大学を含む）」を含む。

注2) ( )内はサンプル数。

## 第3節 \* 社会に対する認識、意識

都村聞人



学歴の社会的意味については、否定しきれないと考えている母親が多い。また、母親が高校・専門学校・短期大学卒業の場合に、資格に対する有用観が強い。しかし、「いい大学を卒業し、いい仕事につくことで幸せになれる」という考え方には学歴を問わず否定的な母親が多い。

本調査においては、回答者である母親の社会に対する認識、意識についてたずねている。12項目のうちから6項目を選び、母親の学歴別にみてみよう（図6-3-1）。母親の学歴に関しては、「高校・専門学校・短期大学卒業」と「四年制大学卒業」に分類している。

### 1. 母親が「高校・専門学校・短期大学卒業」の場合に、資格有用観が強い

「これからの社会では学歴は意味をもたない」に関しては、母親の学歴を問わず「あまりそう思わない」「ぜんぜんそう思わない」の合計が半数以上を占めている。つまり、学歴の社会的意味については、否定しきれないと考えている母親が多い。母親の学歴別にみると、母親が「高校・専門学校・短期大学卒業」の場合には、「とてもそう思う」「まあそう思う」の合計が42.2%であり、母親が「四年制大学卒業」の場合の29.9%よりも高くなっている。

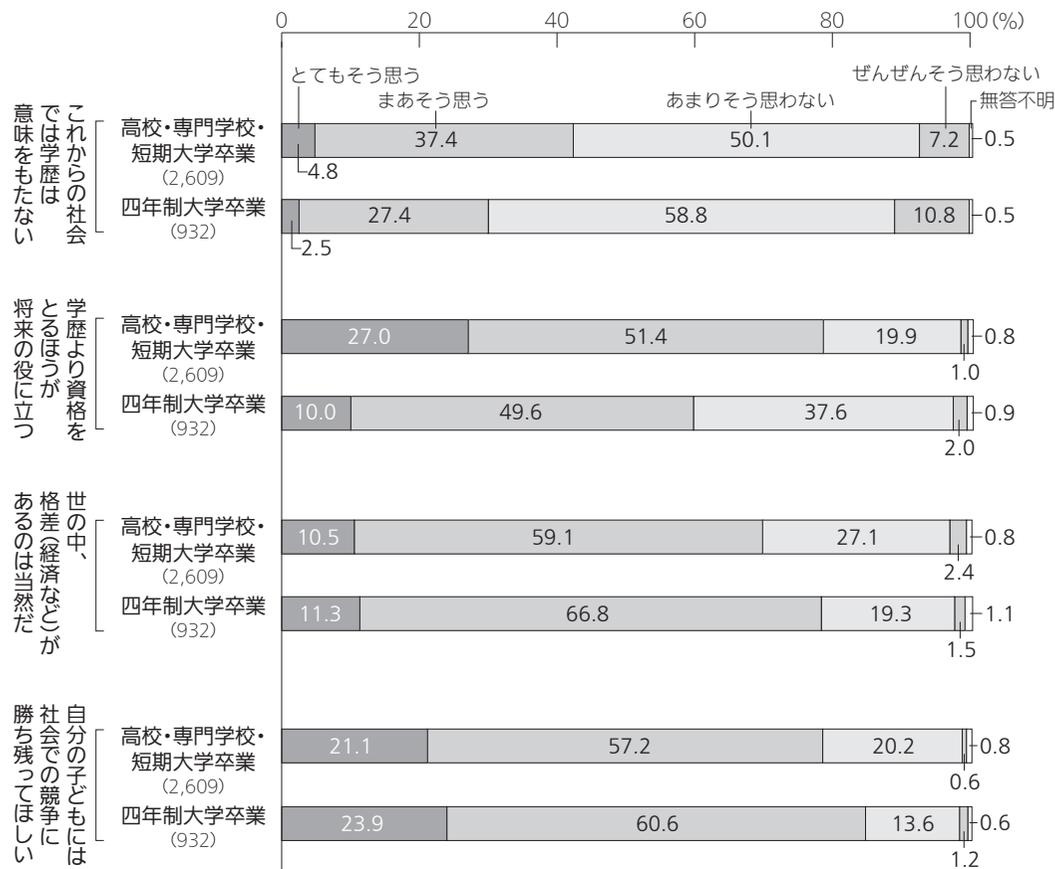
「学歴より資格をとるほうが将来の役に立つ」に関しては、全体に肯定的な意見が多い（年少児～年長児全体で「とてもそう思う」「まあそう思う」の合計が73.7%。図表は

割愛）。とりわけ、母親が「高校・専門学校・短期大学卒業」の場合には、「とてもそう思う」が27.0%、「まあそう思う」が51.4%であり、母親が「四年制大学卒業」の場合よりも高い。母親の学歴の分類のなかに専門学校を含んでいることもあり、資格に対する評価が高いのかもしれない。子どもに対する進学期待と同様に、母親の経験を反映した結果といえる。

「世の中、格差があるのは当然だ」については、肯定意見が多い（年少児～年長児全体で「とてもそう思う」「まあそう思う」の合計が71.5%。図表は割愛）。母親の学歴別にみると、母親が「四年制大学卒業」の場合にやや肯定意見が多い。他方で、母親が「高校・専門学校・短期大学卒業」の場合には、「あまりそう思わない」が27.1%となっている。

「自分の子どもには社会での競争に勝ち残ってほしい」についても、肯定的な意見が多い（年少児～年長児全体で「とてもそう思う」「まあそう思う」の合計が79.5%。図表は割愛）。この質問に関しても、母親が「四年制大学卒業」の場合にやや肯定意見が多い。格差の存在は認めざるを得ないが、自分の子どもには競争に勝ち残ってほしいと考える母

図6-3-1 社会についての意識（年少児～年長児・母親の学歴別）



注1) 母親の学歴において、「高校・専門学校・短期大学卒業」には「中学校」「高等専門学校」卒業を含む。また「四年制大学卒業」には「大学院（六年制大学を含む）」を含む。

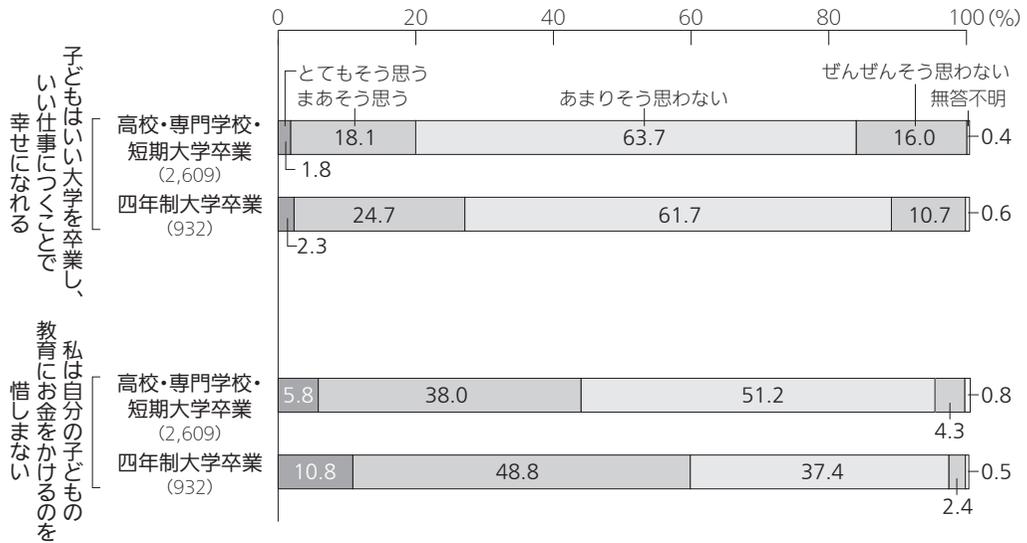
注2) ( )内はサンプル数。

親が多いことがわかる。

「子どもはいい大学を卒業し、いい仕事につくことで幸せになれる」については、母親の学歴を問わず、否定的な意見が多い（年少児～年長児全体で「あまりそう思わない」「ぜんぜんそう思わない」の合計が77.7%。図表は割愛）。“よい大学に進学することにより、よい仕事につくことができ、幸せな人生を歩める、”という考え方は、これからの社会では実現できないと母親が考えていることがわかる。

「私は自分の子どもの教育にお金をかけるのを惜しまない」については、母親の学歴別に違いがみられた。母親が「四年制大学卒業」の場合は、「とてもそう思う」「まあそう思う」の合計が59.6%と約6割に達しているが、母親が「高校・専門学校・短期大学卒業」の場合には43.8%にとどまっている。実際の教育費支出とはまた別の問題であるが、子どもの教育に積極的にお金を支出しようとする層とそうではない層にわかれている傾向がよみとれる。

図6-3-1（続き） 社会についての意識（年少児～年長児・母親の学歴別）



注1) 母親の学歴において、「高校・専門学校・短期大学卒業」には「中学校」「高等専門学校」卒業を含む。また「四年制大学卒業」には「大学院（六年制大学を含む）」を含む。

注2) ( ) 内はサンプル数。